自我と思想

鮎川信夫

桶谷秀昭 …… 生活喪失と思想喪失
磯田光一 …… 戦後思想の現在
鶴見俊輔 …… 戦争について
秋山駿 …… 精神の確立と戦争
月村敏行 …… 〈対幻想〉と〈共同幻想〉
橋川文三 …… 体験・思想・ナショナリズム
内村剛介 …… 拡散する閉塞状況
北川透 …… 思想的な肉眼の成熟

思潮社

自我と思想

鮎川信夫

…桶谷秀昭 ―生活喪失と思想喪失
…磯田光一 ―戦後思想の現在
…鶴見俊輔 ―戦争について
…秋山駿 ―精神の確立と戦争
…桶谷秀昭 ―生活喪失と思想喪失
…磯田光一 ―戦後思想の現在　スム
…鶴見俊輔 ―戦争について
…秋山駿 ―精神の確立と戦争

思潮社

自我と思想

一九八二年一月十日発行
定価＝一九〇〇円

著者――鮎川信夫ほか
発行者――小田久郎
発行所――株式会社思潮社
東京都新宿区市谷砂土原町三―一五・〒一六二・電話二六七―八一四一・(編集)二六七―八二五三(営業)・振替東京八―八一二一
ブックデザイン――清原悦志
印刷・製本――凸版印刷株式会社

1092-200044-3016

自我と思想

鮎川信夫

桶谷秀昭 ―生活喪失と思想喪失
磯田光一 ―戦後思想の現在
鶴見俊輔 ―戦争について
秋山駿 ―精神の確立と戦争
月村敏行 ―〈対幻想〉と〈共同幻想〉
橋川文三 ―体験・思想・ナショナリズム
内村剛介 ―拡散する閉塞状況
北川透 ―思想的な肉眼の成熟

思潮社

目次

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.co

…桶谷 秀昭■生活喪失と思想喪失 11
■かの時にはかの生き方があり…… ■フランス風ブルジョワはかなわないな ■無私の情熱に貫かれた西洋かぶれ ■もはや「理想的な生活」などはない ■最低限自分だけは救ってみせる思想の力 ■相対感覚という安全装置 ■反思想と日常の生活間との隙間

…磯田 光一■戦後思想の現在 37
■マッカーサー、吉田茂と戦後思想 ■一九四〇年代論の欠落と八・一五転向 ■六十年安保と戦後思想の転回——吉本隆明・竹内好 ■心情的ナショナリズムの露出と増幅 ■韓国問題と現代版征韓論の風潮 ■日本人のメンタリティと戦後思想のディレンマ——近代と反近代のあいだ ■大衆について——「大衆の原像」と大衆論の陥穽 ■思想の共同性・現実運動の党派性 ■情況の不吉なマヌーバート化 ■左翼思想内部に膨脹するナショナリズム ■戦後思想の破産、個の思想軸の自立を

…鶴見 俊輔■戦争について 71
■徴兵検査まで ■戦争と反戦は等価か ■暴力の構造 ■仲間について ■ナショナルとマルチナショナル ■二つの反戦論理 ■大正時代から戦後民主主義まで ■イロ

…秋山 駿■精神の確立と戦争 105
■人生の変わり目 ■戦中世代のわからなさ ■精神原理の確立 ■日本とは何であったか ■日本語の経験 ■敗戦後の社会 ■戦前と戦後の社会 ■生き方のスタイル

ニーとユーモア ■自我の破壊 ■絶対的な正義 ■五分五分の論理と七三の論理 ■天皇の陰謀と鬱ぎの虫 ■不従順のすすめ ■吉本隆明について

■現実社会との距離 ■人生における損と得 ■加害者としての世代 ■孤立した言説

…月村 敏行■〈対幻想〉と〈共同幻想〉 139

■戦後における「荒地」の効用 ■〈対幻想〉の問題性 ■〈共同幻想〉の枠組がしっかりしていれば……。 ■日本の〈共同幻想〉の特質について ■いちがいに「豹変」とは言えない ■第二次「荒地」の創世 ■思想に対する不信感がある ■〈自然〉の問題と「乙な位置」 ■詩人と批評について ■〈事件の詩〉と〈日常の詩〉について ■『一人のオフィス』について ■老齢の問題と〈対幻想〉

…橋川 文三■体験・思想・ナショナリズム 169

■戦争期の二年間の違いについて ■マチネ・ポエティクの人びと ■思想と現実とのすきま ■鮎川信夫氏とエリオット体験——ホール・ライフとは何か ■歳時記 ■鎖国について ■橋川文三氏と日本浪曼派体験 ■小林秀雄と保田與重郎 ■時代の閉鎖——ダンスホールの閉鎖ほか ■軍隊体験について ■天皇および天皇制について ■戦後ナショナリズムの帰趨——経済ナショナリズムについて ■文化ナショナリズムとニヒリズム ■思想の力 ■ナショナリズムのコンピューター処理 ■両刃の剣としてのナショナリズム

：内村剛三■拡散する閉塞状況　208
■極限状況を方法的につかまえる　■「荒地」と「果実のない土地」　■苦しんでいないから詩も書けない　■原爆有効説の上の安泰　■ロシア・マルクシスト・無所有の論理　■無節操こそが日本の節操　■ヤクザ的心性・飯が食えないということ　■石原吉郎＝詩の拡散と崩壊　■ロシア語の呪縛と影響　■孤立者の防禦の姿勢　■言葉は伝わるもの

：北川透■思想的な肉眼の成熟　235
■黒田三郎の異質性　■詩人と権力　■「市民生活」からの眼　■「荒地」の転回　■詩の土台としての「文明観」　■詩の存在理由　■一貫する思想的モチーフ　■「戦中派」はあるのか　■現在が引き受ける問題　■難解詩とは

・鮎川信夫■〈位置〉と〈姿勢〉　270

清原 悦志 ブックデザイン

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.co

・鮎川信夫

：桶谷秀昭 ―生活喪失と思想喪失

だれそれはマルクス主義ならマルクス主義という立場に立っているとか、だれそれは実存主義だとかいうふうな、そういう立場というものがこの輪郭というのをつくりますか

ら、輪郭が曖昧になってしまうと立場がはっきりしない。それが、即思想喪失といえるのかどうかということになりますと、私はそうじゃなくて、本当の思想の秘密というのはむしろ曖昧になったときから問われ始めるんだ、いまは確かに輪郭明瞭な思想というもののみを思想ととらえている人からすると、なんだが無思想な時代にみえるけど、実際はそうじゃないんじゃないか。

…桶谷 秀昭

ここへ来る前に鮎川さんの『歴史におけるイロニー』を拝見しました。一番うたれましたのは、戦中派という世代、私のような世代の人間のすぐ上に当たる方の思想形成というのが大体昭和三十年代の半ばごろまで非常に目立ってありまして、自分がものを考えるときに、鮎川さんでも、吉本（隆明）さんでも、橋川（文三）さんでも、いつも気になっていたわけですけども、鮎川さんのあのご本で、そういう戦中派の世代の思想形成というのが一つの危機にさしかかってきて、浮き上がったというふうな言葉を使われていますが、浮き上がったのは一体だれが浮き上がらせたのか、それは非常に複雑で、微妙なところがありまして、まず自分に引きつけていえば、そのあとにくる人間にうまく戦中派の思想形成の本当の秘密というのが伝わらない。それから、そのあとになるともっと伝わらないという、これは日本の明治以降の世代間の思想の継承にあたっての断絶が、あるんだと思いますけれども……。

そんな大きなことをいわなくても、私などは戦中派の人たちの、自分の年上の世代のものの考え方としては何かよくわかるし、それから、よくやっているな、という感じを持っていたんです。しかし、立場を変えて、今度は戦中派の人が、何いっているんだ、わかっていないんだぞ、ということは必ずあるだろうと思うんです。

何かそういうふうなことが、そういう思想の秘密みたいなものが、これが秘密なんだぞということがうまく伝わらずに、そのまま別のところへ横すべりしていった。だれがすべらしたのかということは難しいんですけどもね。つまり戦中派の思想というのはやっぱり特殊なものであって、どうも普遍性がないんじゃないかというふうな批判がそこに出てくるだろうと思います。しかし、私はそうは思わないんで、どんな思想だってみんなある特殊なところから、伝達しがたいようなところから出てくるもんだと思います。このことは何も戦中派の思想だけじゃなくて、一般に思想が輪郭のすっきりした形でいわれていた時代が戦後ずうっと続いて、最近はその輪郭が非常に曖昧になってきてしまっているんじゃないか、ということが一ついえるんじゃないかと思うんです。

輪郭が曖昧になりますと、だれそれはマルクス主義ならマルクス主義という立場に立っているとか、だれそれは実存主

義だとかいうふうな、そういう立場というものがこの輪郭というものをつくりますから、輪郭が曖昧になってしまうと立場がはっきりしない。それが、即思想喪失といえるのかどうかということになりますと、私はそうじゃなくて、本当の思想の秘密というのはむしろ曖昧になったときから問われ始めるんだ、いまは確かに輪郭明瞭な思想というものをみを思想ととらえている人からすると、なんだか無思想な時代にみえるけど、実際はそうじゃないんじゃないか、こういう機会を一つの千載一遇の転機たらしめずに、何が出来るのかという感じがあります。

・鮎川 信夫

確かにそれはおっしゃられるとおりだと思いますね。いまいった立場、簡単にいえば党派性とか、そういうものでいままでは輪郭をはっきりさせてきたということが一つあると思うんです。政治の場で、まず政治の言葉で思想というものをすかして見るわけですよね。ぼくなんか、どっちかというとそれがとてもいやなわけです。だから、最近ほとんど批評的なものを書く気がしなくなったのは、政治の言葉でふるいにかけられて、まずそこを通過しないと届かない、まずそこでせきとめられるということがあるもんですからね。それはごく親しい人の間でもあるわけです。あいつはこういうふうに今度変わったんじゃないか、とか、いまどきこの情況においてこういうことをいうのは、つまり政治的にいえばこうである、とか、そうなっちゃうわけでしょう。だから、そういうところを通過するのがいやだということが一つあって、どうも思想的発言というのはおっくうなわけです。

・・そのことで、鮎川さんのオーデンを論じられた三十年代の問題を非常に面白く拝見しました。オーデンの“Another time has other lives to live”「かの時にはかの生き方があり、またの時にはまたの生き方がある」と鮎川さんは訳していますが、すぐ転向とか変節というふうにとられる。それは政治の言語にすぎない。文学的政治の言葉です。思想はライフなんだ、ライフという微妙な生き物なんだ、とわからなければ、生きない言葉ですね。ああいうことは本当に個人の生涯というものを直視したら、あるんですね。

・あるんです。それから逃れられないわけです。ある意味では、どんな超越的な思想でもそ

れは逃れられないと思うんです。もうそれは逃れられないし、また事実、時に応じてどんな発言をしても、それが政治の言葉になるということは当然でもあるわけです。だから、そういうこともわかってはいるんですけどね。ただ、自分としてはおっくうだというような気が先に立つということ。

それからもう一つは、さっきおっしゃった世代間の断絶みたいなものですね。つまり何か伝わらないというのが先にくるということは、ぼくらの場合だと、まず自分の前世代というものとの断絶が一番最初にあったわけです、戦争中にきていますからね。

とにかく向こうのいうことはこっちは絶対納得できないし、おそらくこっちのいうこともわからないだろう、と……。実際は口に出していわないんですけどね。だけど、とにかくいまはいうとおりしなきゃしょうがない、そのかわりこっちは、ちょっと妙ないい方になるけれども、じゃ、おっしゃるとおりにします、戦争へいけといわれればいきます、右を向けといわれれば右も向きます、でも、もしそれが間違っていたら今度はいわしてもらいますよ、という気はあったわけですよね。だけど、とにかくいわれたとおりするという、それよりしようがなかったということが一つありますしね。また、それほど自分の思想というものに確信も持っていなかったということもあります。実際いうと、自分の思想に根拠を与えるものがなかったわけですからね。論理的にもなかったし、現象的にももちろんなかったしね。だけど、そういう感じというのは奇妙なことに、自分が今度、戦中派としていくらか成長した世代になって、あとの世代というのが出てきますね。そのときは今度は逆になっちゃうわけですよ。自分と前世代というものの間につくった、意識的な断絶、それはほとんど心の中につくったんですけれども、そういう断絶が今度は逆に、あとからくる世代と自分たちの間にもあるんじゃないか、というふうに転換されちゃうわけです。

だから、そのことで非常に絶望的になることもないわけです。なぜかというと、ある程度そういう孤立した心情というか、思想というか、そういうものに慣れているところがあるんで

すね。何か外界とは別に、自分の思想があればいいんだというだけの、そういうところがいざとなるとあるわけですよね。たまたま発言の機会なんか与えられれば、まあいろんなことをいいますけど、わからなくてもともというぐらいの気がどうもあるわけです。それがいまだに抜けないというところがあると思いますけどね。

…この頃、日華事変から昭和十六年ころまでの、小林秀雄の歴史感覚のことを考えておりまして、いま鮎川さんがおっしゃったことでひょっと思いついたんですけど、戦争を正しいとは別に思っていない、じゃ、正しいと思わなければどういう自分の根拠で正しいと思わないのか、そういう根拠というのは大変微妙なんだという事です。

戦争に反対するという、マルクス主義の立場から反対する場合には、それは未来に必ずこの戦争はダメになるよという一つの信念でしょう。歴史の必然が安心の別名になる。一方、日本浪曼派のような、過去のほうに本当の日本があったんだという喪失感から、また歴史の流れに逆の形で水平に自分の思考がさかのぼっていく。そのいずれでもない、ある微妙なものの考え方の実体というふうなものが、一所懸命耐えている、古くて新しいような心というものがある、と思うんですね、そういうふうな心なんじゃないかと思うんですけどね。それがどうも、一見輪郭がはっきりしないものですから、結局、あいつは戦争を肯定したんだとか、どうだとか、いうふうにいわれてしまうというふうな悲劇があるんですね。

話は違いますけれども、だいぶ前に、磯田光一さん、大久保典夫さんと、八月十五日に天皇の敗戦放送を聞いたときにどう感じたか、という話をしたときに、磯田さんは、これはいっぺん敗けたといっておいて、また機を見てやるんだというふうに思ったというんです（笑）。これはまた驚くべき意見だと思ったんですけどね。大久保さんは、いや、なんとも特別に思わなかったというんです。私の場合は、これからどうやって生きていっていいのかわからないというふうな……。まあ一面だけ誇張するのはよくないんですけども、やっぱりどうも生き方がわからなくなりまして、たまたま置かれた情況も、学校を途中でやめていたとか、そんなこともあったせいもあるんでしょうけれども、非常に千差万別で、同じ世代でも考えがいろいろ違うもんだなと思いましたね。

鮎川さんの世代の場合でも、橋川さんのように日本浪曼派への関心を抱いていた方と、書いたものを拝見しますと、鮎川さんの場合にはそうじゃなくて、無縁じゃないが、それから距離のあるところにいたというようなところがあります

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.co